

# 小学校教員養成課程学生の教育実習における 体育授業観察の観点

廣兼 志保 (鳥根大学教育学部初等教育開発講座)

キーワード：小学校教員養成 体育科 授業観察 観点 教育実習 教科教育

## 1 研究の動機及び目的

### (1) 研究の動機

我が国の教員養成課程では、学生の実践的力量をいかに育てるかという課題に対して近年様々な取り組みが実践されている。教育実習で実践的に学ぶ教育方法の知識・技術と、学部の専門科目で学ぶ理論との往還による実践的力量の形成の重要性が指摘されて久しい。筆者は、学部の教育実習担当教員として1～4年生までの教育実習運営の実務に携わり、教育実習現場で学生指導を担当してきた。同時に、小学校体育科教育法関連の授業も担当している。その経験から、教育実習での学生の授業観察の観点到に学年により差異があること、教科教育法の授業での理解の様相に教壇実習の経験の有無により差異があることに気づいた。しかしながら、学生の授業観察の観点到に、いつ、どのような差異が生じるのかについては未だ具体的に検証されておらず、現段階で気づいた差異は、経験から得た印象でしかない。

授業観察という活動は、教育実習だけでなく、学部の専門教育においても実施されている。学生達は、学部教育の4年間に繰り返し授業を観察する。その体験の積み重ねによって観察の観点到が育っていく。筆者は、指導教員として、学生が観察し捉えた授業の事実や考察を価値づけ、学んだ

個々の事柄を定着させたり、学生の理解や思考をゆさぶって新たな観点到を獲得させたりする活動を日々営んでいる。その中でどんな学習課題を提示し、どんな指導をすれば学生に「このカリキュラムならではの」「今、この時期だからこそこの」学びが獲得されるのかと、筆者は試行錯誤を続けてきた。そしてその答えを得るためには、学生の授業観察の観点到の発達段階を解明し、その発達段階を見通した指導を考える必要があると考えるに至った。

授業観察にあたっては、対象となる授業、指導技術や授業の展開についての知識、対象学級の実態についての知識、学生自身の運動経験や興味など様々な条件によって、学生が授業中の何に着目しどんな考察を得るかが左右されると予想される。しかし、それらの条件を制御し、再現性のある一般化されたモデルとしての観点到形成のプロセスをとらえようとするには困難が予想される。

そうであるならば、結果として得られた観点到の様相を「今、ここ」にある授業と学生とが対峙する瞬間を一回性のものとしてとらえる実践-考察-改善のサイクルを積み重ねていく方が、学生指導の現場に立つ教員にとって、より現実感をもって実態を明らかにすることができるのではないだろうか。本研究をその第一歩と位置づけ、学生の授

業観察の観点の変化と発達を解明する足がかりとしたい。

ところで、小学校体育科の授業は、学習者が身体を動かして様々な行動や活動をすることにより授業を展開するという特性をもつ。したがって、授業者には、授業の中で生じる出来事や学習者の身体の様子などを観察し、読み取った事柄を瞬時に教科の目標や学習方略につなぐ技術が求められる。この技術が授業実践力の巧拙を決定づけるといえる。そのような授業実践力の基礎を築くには、教員養成課程の初期段階では、授業における教師と児童の相互作用を観て授業展開の構造を読み取る力を育てることが必要ではないだろうか。そこで、本研究では、考察の対象として小学校体育科の授業をとりあげることにした。

## (2) 本研究の対象である 2 年次の教育実習の位置づけと目標

本研究の対象である島根大学教育学部の教育実習カリキュラムは、およそ 1～2 年次における観察実習の段階と 3～4 年次における教壇実習の段階に大別できる。

1～2 年次の実習の重点目標は、授業観察と授業協議を通して「授業が教師と学習者との相互作用から成り立っていること」「教師は様々な教授技術や展開の工夫を用いて授業をしていること」を理解することである。観察にあたっては「教えられる側から教える側への意識の転換」が求められる。

1 年次の教育実習では、授業（保育）観察を通して、授業者（保育者）と学習者との相互作用に着目し、観察された個々の事実が学習活動の展開においてどのような意味をもつかを考察する。この段階では、どの校種・教科にも共通する授

業・保育の基礎的な構造を理解することが目指される。

1 年次での経験をふまえ、本研究の対象である 2 年次の教育実習では、各学生の専攻に応じた校種・教科の観点から授業を観察し、個々の事実が学習活動の展開においてどんな意味をもつかを考察する。2 年次は、各教科の教育法（または保育内容の構成）の授業を履修する時期にあたる。教科教育法や保育内容の構成の授業を通して、授業（保育）の構想の基礎的な方法を学び、授業（保育）構想力を身につけることが目指される。同時に、専攻に応じた教科内容や保育内容の知識・技術を身につけることも求められる。2 年次は、学部の専門科目と教育実習とで学んだ「教育内容」と「教育方法」に関する知識・理解と技術とを相互に関連づけることによって授業・保育構想力と授業・保育実践力の基礎を育成すべき時期である。この時期に学んだ基礎をもとに、3 年次以降の教育実習では、授業実践に挑むこととなる。

本研究の対象とした授業観察は、このような位置づけにあり、通年で履修される 20 時間の実習プログラムのうち最初の 4 時間に実施する活動である<sup>注1)</sup>。この授業観察は 2 年次前期に実施されたが、観察者である初等教育開発専攻の学生の殆どは 2 年次後期以降に体育科の教育法や教材研究の授業を履修するため、この時期には体育科の教育法関連の授業も教材研究関連の授業も履修しておらず、教科に関する専門的知識をまだ学んでいない状態であった。よって、この時期の学生の授業観察の観点は、1 年次に身につけた授業観察の力を反映したものであると予想される。同時に、これらの観点の特徴は、体育科教育法関連の授業を履修する前段階における学生のレディネスを示していると考えられることができる。

### (3) 研究の目的

以上の事柄をふまえて、本研究では、教科教育法の専門的な学習が始まる2年次生という時期に着目し、鳥根大学教育学部の教育実習科目「学校教育実習Ⅱ」における体育科授業の観察において、①学生は授業中のどんな事実に着目したか②学生は着目した事実からどんな考察を得たか③学生の授業観察の観点にはどんな特徴があるか、について明らかにする。

## 2 研究の方法

本研究は、平成21年度に実施した鳥根大学教育学部の「学校教育実習Ⅱ」における体育科授業の観察・授業協議の後、学生が提出したワークシートを資料とする。まず、自由記述文を文意によって分類し、その件数に着目して分布の状況から学生の視点の特徴を示すカテゴリーを抽出する。次に、抽出されたカテゴリーの自由記述文の内容を質的に考察し、学生がどのように授業を観察し何を考えたかについてデータにそって学生の内的視点から解明する。このような方法をとることによって、より具体的な意識の内実にせまっていきたいと考える。

対象者：平成21年度 鳥根大学教育学部 学校教育課程 教育学部初等教育開発専攻2年生のうち、体育科の授業を参観した者16名（ただしこの中に保健体育科を副専攻とする学生はいなかった）

対象授業：鳥根大学教育学部附属小学校

第1学年 体育科

単元名「リレー遊びをしよう（走の運動遊び）」

授業実施日：平成21年6月9日

授業協議会実施日：平成21年6月12日

### 資料の分析方法：

学生が記録したワークシートの記述について、

- 1) 授業中のどんな出来事を取り上げ
- 2) どんな考察を記述しているか

に着目し、文意のまとまりごとに文章を切片化してデータ化した。

得られたデータは、文意により、高橋（1996）らによって作成された15項目からなる体育授業観察チェックリストを手がかりに分類された。分類は大学教員1名（18年間現職に従事）と大学院生2名（うち1名は10年間保健体育科教員として従事）の計3名で行った。分類に際してメンバー間で意見が分かれたデータについては、意見が一致するまで議論し最終的な分類を行った。記述の中には、「事実と考察」をともに書いたもの、「事実のみ」を書いたもの、「考察のみ」を書いたものの3種があったが、その場合、「事実と考察」が一連の文脈になって記述されているものは1件、「事実のみ」が記述されているものは1件、「考察のみ」が記述されているものは1件とカウントした。

考察の対象としたワークシートの設問は「観察した授業について自分なりの観点を定め、文章に整理しよう」である。この設問は、授業協議会の準備として、協議のテーマやトピックを見出す際の手がかりとするものとして設定されている。学生の記述内容は、授業協議の場で取り上げたいトピックとして選ばれたものであるといえる。したがって、これらの記述内容は、学生がどんな観点を授業を観察したかを反映するものと考え、分析の対象として取り上げた。

### 3 結果及び考察

#### (1) 学生の自由記述文の分類

学生の自由記述文は、文意により高橋（1996）らによって作成された体育授業観察チェックリストに示された項目にしたがって分類された。項目の内容を下記に示す。

##### A. 教師の相互作用

- ①先生は、ほめたり励ましたりする活動を積極的に進めていたか
- ②先生は、心をこめて児童に関わっていたか
- ③先生は、適切な助言を積極的に与えていたか

##### B. 学習環境

- ①学習成果を生み出すような運動（教材・場づくり・学習課題）が用意されていたか
- ②楽しく学習できるような運動（教材・場作り・学習課題）が用意されていたか
- ③学習資料（掲示物・学習ノート・カードなど）が有効に活用されていたか

##### C. 意欲的学習

- ①子どもが意欲的に学習に取り組んでいたか
- ②子どもの笑顔や拍手、歓声などがみられたか
- ③子どもが自ら進んで学習していたか

##### D. 授業の勢い

- ①授業の場面展開がスムーズに行われていたか
- ②移動や待機の場数が少なかったか
- ③授業の約束ごとが守られていたか

##### E. 効果的学習

- ①子どもが何を学習し、何を身につけようとしているのかが、よくわかる授業だったか
- ②子ども同士が積極的に教え合っていたか
- ③子どもの上達していく姿がみられたか

自由記述文の分類結果を図1に示す。

学生の記述は合計51件あった。図1の【 】内は大カテゴリーを示し、数字は各カテゴリーに分類された記述件数と全記述件数に対する比率を示す。〔 〕内は小カテゴリーを示し、数字は小カテゴリーに分類された記述件数と大カテゴリー内の

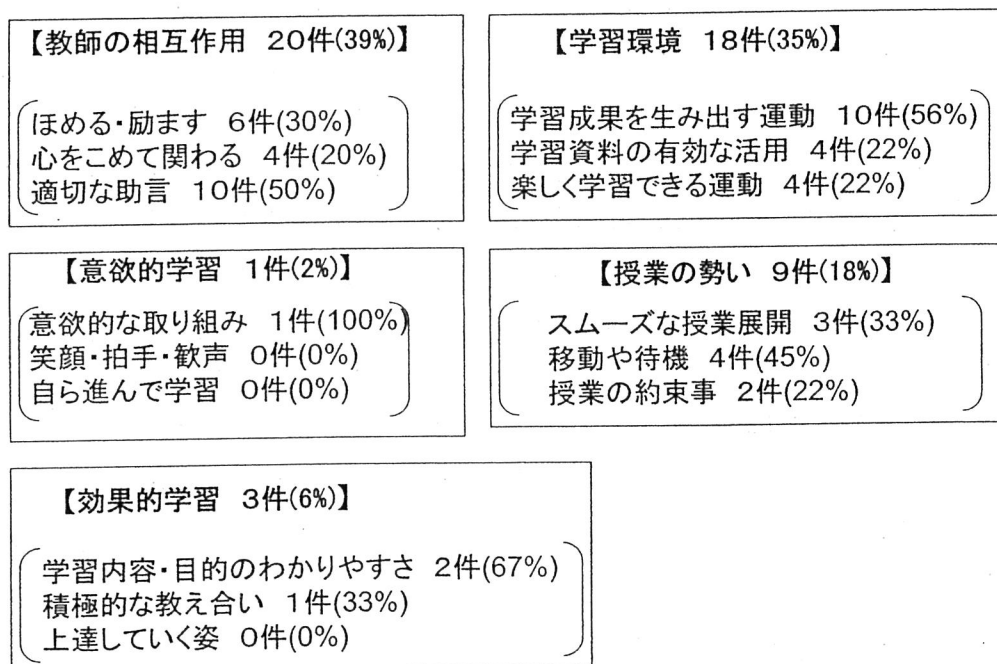


図1 学生の自由記述文の分類



全記述件数に対する比率を示す。最も記述件数が多かったのは「教師の相互作用」で、計20件あり、全体の39%を占めていた。次いで多かったのが「学習環境」の計18件で、全体の35%、「授業の勢い」9件は18%であった。よって、これら3つの大カテゴリーは学生が着目しやすい観点であったとみることができる。

一方、実際には授業中の子ども達は意欲的かつ主体的に授業に取り組んでおり笑顔・拍手・歓声も随所にみられていたが、「意欲的学習」や「効果的学習」に分類された記述は少なかった。高橋(1996)らによるこのチェックリストは、現職の小学校教員を対象とした調査研究を基に作成されたものであり、現職教員の授業観察の観点を反映したものと見える。これに対して上記の結果は、学生が授業観察で「子どもの笑顔や拍手、歓声などがみられたか」「子どもが自ら進んで学習していたか」「子どもの上達していく姿がみられたか」という観点に着目していないことを示している。現職教員は授業を観察する際に子どもの取り組みや育

ちの様子に着目するのに対して、2年次の学生は子どもの行動や反応よりも教師の行動や学習環境に着目しその意味を解釈する傾向にあるといえる。林ら(2006)の教育実習生を対象にした研究では、実習生自身の反省から、実施した授業において子どもの動きを看取ることとその看取りに応じた適切な相互作用ができないことが指摘されている。子どもをみるということは、実習生の段階では難しい観点であることが示唆される。

では、学生は具体的に教師の行動や学習環境の何に着目しそれをどのように解釈しているのだろうか。次に、「教師の相互作用」「学習環境」「授業の勢い」について、学生の自由記述文を分析する。

## (2) 学生の自由記述文の考察

### 1) 「教師の相互作用」に関する記述と考察

内訳の半数を占めていた「適切な助言」に着目すると、「子どもの感想で大事なことは発問を重ねて広げる」「(子どもの)意見をただ【おもしろかつ

表1 「教師の相互作用」に着目した事実の記述と考察の典型例

観点	事実の記述	考察(矢印は事実の記述との関連を示す)
① ほめる・励ます	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちが自由にコーンの位置を考えている時に「楽しみだな、みんなのリレー」という先生の言葉があった</li> <li>児童がリレー遊びをしている時、教師が「いいね」「速い速い」「がんばれ、がんばれ」など声かけをしていたのは</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→この言葉は子どもたちの意欲をかき立てると思った(もっと工夫しよう、先生の期待に応えようなど)</li> <li>→良かった</li> </ul>
② 心をこめて関わる	<ul style="list-style-type: none"> <li>泣いちゃった子の手を(教師が)引っぱって移動したのは</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→良かったのか?</li> </ul>
③ 適切な助言	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの感想で大事なこと(コーンの位置を工夫することで速く走れるようになったなど)は発問を重ねて広げる</li> <li>出来ていない子、班には言葉だけでなく教師自ら動いてヒントを与えていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(考察文なし)</li> <li>→言葉だけでは伝わりにくいので実際に動いて示すことでよりわかりやすく伝わる</li> </ul>

た』と答えさせるのではなく、どうおもしろかったのか、なぜおもしろかったのかを聞いて考えを深めていた」「他の子どもの反応を取り上げ全体に拡げていた」といった典型例にみられるように、ふりかえりの場面での教師の一斉指導における発問や受理・活用の言葉が記述されていた。ふりかえりの場面での教師の言葉に着目していた記述は6件あり、「適切な助言」に分類された記述の過半数を占める。これらの考察からは、学生が、子どもから学習成果に対する考察を引き出し、深め、学級全体にひろめる教授技術を読み取ろうとしていた様子がわかる。

一方、個別指導の場面での相互作用については、「出来ていない子、班には言葉だけでなく教師自ら動いてヒントを与えていました。言葉だけでは伝わりにくいので実際に動いて示すことでよりわかりやすく伝わる」という典型例がみられ、学生が非言語的な相互作用についても着目していることがわかる。

これらの記述に共通の特徴は、「言葉のかけ方」に着目し教師の言葉が授業の展開の中で果たす役割を解釈しようとしていることである。しかしながら、教師の言葉かけの内容と学習目標や学習内容とを結び付けた記述はみられなかった。

「ほめる・励ます」では、個別指導での言葉かけに着目した記述が4件あり、過半数を占めていた。典型例に「子どもたちが自由にコーンの位置を考えている時に『楽しみだな、みんなのリレー』という先生の言葉があった。この言葉は子どもたちの意欲をかき立てると思った」という記述がある。学生が子どもの情意面にはたらきかける教師の言葉に着目していることがわかる。他にも「いいね」「速い速い」「がんばれ、がんばれ」など、情意面にはたらきかける言葉が記述されてい

た。体育授業中の教師のフィードバック行動は授業成果に影響を及ぼすとされ、子どもは教師の助言から運動技能を改善するための大切な情報を得る（高橋ら2003）とされている。対象授業でも子どもへ巧みな動きを促す教師の言葉かけはあったが、技能面にはたらきかける教師の言葉についての学生の記述はみられなかった。

したがって、学生は教師の言葉の役割を子どもの情意面への働きかけと関連づけて解釈できるようにはなっているが、技能に関わる学習目標や学習内容と教師の言葉かけとを結び付けて考察する観点はまだ獲得されていないことが推察される。

## 2) 「学習環境」に関する記述と考察

内訳の半数を占めていた「学習成果を生み出す運動が用意されていたか」に分類された記述に着目すると、「コーンの置く位置を考える時に、実際に置いてみて、走ってみて、走りやすいかをチェックして、みんなで工夫するところに、自ら考えて学ぶということが行われていたと思う」という典型例からは、学生が一連の学習活動を学習過程としてとらえ、それらの活動の意味を考察していることがわかる。子どもに「考えさせる」「工夫させる」活動に着目した記述は6件あった。一方、動きの仕組みやコツの観点から教材としての運動の意味をとらえようとしている記述は、「走るときもコーンを持って軸にした方がまわりやすいということを経験を通じて体で学んでいた」という記述が1件あったのみであった。このことから、学生は授業中の事実について、認知的学習の観点から意味を解釈する傾向にあるといえる。

「学習資料が有効に活用されていたか」については、「リレーのルール確認は図で示しながら、授業のテーマも黒板に書きながら皆で声に出したり発問したりして視覚的かつ聴覚的に覚えらる工

表2 「学習環境」に着目した事実の記述と考察の典型例

観点	事実の記述	考察 (矢印は事実の記述との関連を示す)
① 学習成果を生み出す運動	・コーンの置く位置を考える時に、実際に置いてみて、走ってみて、走りやすいかをチェックして、みんなで工夫するところに、	→自ら考えて学ぶということが行われていたと思う
② 学習資料の有効な活用	・リレーのルール確認は図で示しながら、授業のテーマも黒板に書きながら皆で声に出したり発問したりして	→視覚的かつ聴覚的に覚えられる工夫になっていると思った
③ 楽しく学習できる運動	・まずはそれ(ねらいである本運動)の前に、しっかりとウォーミングアップがあった  ・班活動が中心となっていた	→そのウォーミングアップにも児童が自然と全力で走れるような楽しさが盛り込まれていた  →友だちと協力したり、友だちを一生懸命応援するという意欲も高まる内容だった

夫になっていると思った」という典型例のように、全て一斉指導時の教授技術としての黒板の使い方に着目した記述であった。

「楽しく学習できるような運動が用意されていたか」については、「まずはそれ(ねらいである本運動)の前に、しっかりとウォーミングアップがあった。そのウォーミングアップにも児童が自然と全力で走れるような楽しさが盛り込まれていた」「最初にウォーミングアップとしておにごっこをしていた。体もあったまる上、精神的にも気持ちののってくるのではないかと思った」という典型例のように、導入部でのウォーミングアップ教材に着目した記述が3件あり、学生が、学習過程の設計と教材の特性を結び付けて、活動の情意面での効果を考察していることがわかる。それは「カーブをすばやく走る」という単元の技能目標につながる下位教材であったが、単元の技能目標との関連に着目した記述はみられなかった。このことから、学生は技能面よりも情意面に着目して教材の意義を考察する傾向にあるといえる。

また、「班活動が中心となっていた。友だちと協力したり、友だちを一生懸命応援するという意欲も高まる内容だった」という典型例からは、学習形態に着目し、その形態の情意面での効果について考察していることがわかる。

総じて、学生は、子どもの情意面から授業中の事実を考察する傾向にあることがわかった。

### 3) 「授業の勢い」に関する記述と考察

「授業の場面展開がスムーズに行われていたか」に分類された記述については、「活動が変わる毎に子ども達を集合させ、説明を行ったり、区切りを付ける。違う活動への意識の切り替えが上手に出来ていた。違う活動への意識の切り替えが上手に出来ていた結果、場面展開がスムーズに出来ていた」といった典型例にみられるように、学生は授業の展開におけるマネジメント技術に着目していた。具体的なマネジメント技術としては、「移動や待機の場面が少なかったか」に分類された記述にみられる「子ども達をいくつかのグループに分けそれぞれ〇号車」というグループ名を付けて

表3 「授業の勢い」に着目した事実の記述と考察の典型例

観点	事実の記述	考察（矢印は事実の記述との関連を示す）
① スムーズな 授業展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動が変わる毎に子ども達を集合させ、説明を行ったり、区切りを付ける</li> <li>・違う活動への意識の切り替えが上手に出来ていた結果、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→違う活動への意識の切り替えが上手に出来ていた</li> <li>→場面展開がスムーズに出来ていた</li> <li>→ここ（集合を早めることができていること）から、授業の導入もできていると感じた</li> </ul>
② 移動や待機	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達をいくつかのグループに分けそれぞれ「○号車」というグループ名を付けている</li> <li>・移動や待機の時間が少なくて良かった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→移動がスムーズに行われていた</li> <li>→テンポの早さが良かった</li> </ul>
③授業の約束事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ぱっ」と何かの合図をするだけで子どもが「ぱっ」と動けるようなクラス雰囲気づくり</li> </ul>	<p>（考察文なし）</p>

いる。移動がスムーズに行われていた」という典型例にみられるように、学生は学習形態やグループ編成の工夫に着目していた。また、それらの工夫を授業中に活用するマネジメント技術として、「授業の約束事が守られていたか」に分類された典型例にみられるように「『ぱっ』と何かの合図をするだけで子どもが『ぱっ』と動けるようなクラス雰囲気づくり」が取り上げられていた。

木原ら（2008）は、3年次の模擬授業観察時における学生の気づきの様相について、「集合と移動」に関わる観点がみられなかったことを指摘し、その要因を、模擬授業は学生が子ども役を演じており集合や移動をスムーズに行うことができるためではないかと考察している。このことと今回得られた結果とを考え併せると、授業観察力を育成するための段階的な指導として、マネジメント技術など授業の基礎的条件については観察実習を通して指導したうえで、模擬授業で授業の内容的条件に関わる観点について重点的に指導するという

指導計画が構想できそうである。

#### 4 まとめ

本事例における学生の授業観察の観点には、次の①～⑥に示す特徴がみられた。

- ①学生の授業観察の観点と考察は「教師の相互作用」と「学習環境」に関する内容に集中しており、次いで「授業の勢い」が取り上げられていた。学生は教師の行動や発言に着目しており、子どもの行動や反応についての記述はわずかであった。
- ②「教師の相互作用」については、「適切な助言」に関する記述が半数を占めていた。その多くは、ふりかえり場面での発問の仕方や子どもの発言の受理・活用の仕方に着目し、「教師がどのようにして子どもから学習成果に対する考察を引き出し、深め、学級全体にひろめようとしているか」を読み取ろうとしていた。
- ③「学習環境」については、「学習成果を生み出

す運動」に関する記述が過半数を占めていた。その多くは教材の選定と学習過程の設定に着目し、どんな活動によって授業が構成されているかを読み取ろうとしていた。また、態度面や意欲面の形成との関わりに着目して学習形態の設定の意味を考察しようとしている記述もあった。

- ④「授業の勢い」については、活動場面の切り替えのスムーズさに着目した記述が多かった。その要因として、移動・集合・待機のスムーズさがあげられていた。学生は、移動・集合・待機の際の教師のマネジメント技術に着目しており、そのための手だてとして、グルーピングの工夫や、合図の工夫などがあげられていた。
- ⑤記述された教師の行動や発言は、その多くが学習指導場面での一斉指導による発問・受理・説明に関する内容であった。運動学習場面での個別指導時の行動や発言に関する記述は、ほめる・励ます・動機づけるといった肯定的な関わりについての内容が殆どであった。
- ⑥学生が学習過程や教材の意味について解釈しようとするとき、子どもの情意面から考察しようとする傾向があるといえる。

総括すると、2年生前期の時点では、授業観察において、個々の子どもの取り組みや育ちをとらえる観点は未獲得だが、教師の行動や学習環境をとらえる観点は獲得されている。そのなかでも、どの教科にも共通する授業の枠組みや教授方法をとらえる観点や授業運営に関わる基礎的条件からの観点は獲得されているが、領域や教材の特性をふまえて授業の内容や学習方法を充実させる内容的条件からの観点はまだ未獲得である。これは、授業観察における観点的段階的発達の様相を示唆している。個々の子どもの看取りや領域や教材の特性をふまえた授業観察の観点が、今後いつどの

ようにして獲得されるのか、今後とも継続して考察したい。

上記に示した特徴の背景には、1年次の教育実習で「授業が教師と学習者との相互作用から成り立つこと」「教師は様々な教授技術や展開の工夫を用いて授業をしていること」「授業の展開や学習の流れをとらえること」「教師の発問の意図や前後の発問との関連をとらえること」の理解をめざして、観察→記録→考察→協議→考察といった一連の演習を繰り返し行ってきたことがある。これにより、どの教科にも共通する授業の枠組みや教授方法をとらえる観点が養われたのではないだろうか。

一方、本研究の対象学生は、まだ体育科の教育法や教材研究の授業を履修しておらず、教科や単元に特有の学習目標・学習内容・学習形態などを学んでいないため、観察した事実を、教科や単元の学習目標・学習内容を具現化させたものとしてとらえることがまだできない。しかし、学生は既習の知識・理解の範囲内で事実を考察しようと努力している。そのため、授業をスムーズに運営するためのマネジメント技術に着目したり、教材や学習形態の意味を学習者の態度や意欲の形成と結び付けて解釈しようとしたりするのではないだろうか。

今後、教科教育法関連の授業で教科や単元の学習目標・学習内容を学ばせる際には、それらが授業の中でどのような学習場面や学習形態として具現化されているのかを、事例を用いながら学ぶ活動を取り入れるなどし、すでに獲得した授業観察力に、教科の学習の観点から授業を見る力を積み上げる必要があると考える。

観察実習や模擬授業など、様々なかたちで授業観察が実施されているが、各々のねらいや実施

条件などを勘案しながら授業観察力を段階的に育て、授業構成力・授業実践力の育成へつなごう。

## 5 今後の課題

本事例では、2年次生を対象に授業観察の観点の特徴を明らかにすることができた。今後は、さらに事例を収集・分析し、4年間の学部教育で授業観察の観点がいつどのように変化するかを明らかにしたい。学生の授業観察の観点の発達過程の概要を理解することができれば、教育実習や授業の指導において、学生の発達段階に応じた「今、この時期だからこそ」学習課題や指導方法を選択することができ、学部教育における段階性と実習間・授業間相互の関連性を見通したうえで具体的な指導計画を策定することができるのではないだろうか。

指導現場に立つ一教員として学生と向き合いながら、より充実した教育の実現に向けて、一つひとつ課題を達成していきたいと考える。

## 謝辞

本研究の実施にあたって快くご協力いただいた島根大学教育学部附属小学校小林敏朗教諭と、教育実習の実施にあたりいつも最大限のご配慮をいただいている島根大学教育学部附属小学校の先生方に深く感謝申し上げます。

## 注

1) 「学校教育実習Ⅱ」は学部共通のガイドラインに基づき各主専攻が附属学校園と連携して具体的なプログラムを企画・実施するものである。本研究の対象

である授業観察は、島根大学教育学部附属小学校実習部と筆者とが企画・実施した。

## 参考文献一覧

- 1) 林修・梅野圭史・厚東芳樹・辻延浩(2006)「授業中の『出来事』に対する気づきからみた実習指導の改善に関する検討—小学校水泳実践を例として—」『実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究(平成15～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書)』, 研究代表者:木原成一郎 pp.140-156
- 2) 木原成一郎・村井潤・加登本仁・謝娟・松下篤・林楠・松田泰定(2008)「教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究—テスト映像を視聴した学生の気づき—」日本スポーツ教育学会第13回大会発表資料
- 3) 島根大学教育学部(2009)『履修の手引』平成21年度 pp.62-63
- 4) 島根大学教育学部(2009)『学校教育実習Ⅱ2009ワークシート』p.2, p.21
- 5) 高橋健夫・深見英一郎(2003)「教師のフィードバック行動を観察する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版 pp.53-56
- 6) 高橋健夫・長谷川悦示・日野克博・浦井孝夫(1996)「体育授業観察チェックリスト作成の試み:観察者の評価観点の構造を手がかりに」『体育学研究』第41巻第3号 pp.181-191
- 7) 高橋健夫・日野克博(2003)「観察者が体育授業を主観的に評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版 pp.31-34



# Elementary School Teacher Training Course Students' Points of View in a Physical Education Class

## What Did the Course Students See When They Observed a Physical Education Class in a Practical Education Program?

HIROKANE Shiho  
(Shimane University Faculty of Education)

**Key words** : elementary school teacher training course student, points of view, observation, physical education

### Abstract

This research project is a case study on teacher education for university students.

Its purpose is to examine the points of view of second-year students in an elementary school teacher training course when they observed a physical education class in a practical education program.

I examined the students' observation reports from the following three points:

1. What facts did they notice in the class?
2. How did they consider the facts?
3. What factors did they notice in the physical education classes?

Here are the results:

The students mainly noticed interactions between teacher and children and also the learning environments. Especially, they considered the teacher's instruction languages and teaching materials as learning strategies to motivate the children.

Most students noticed the teacher's practical skills in class management. They tended to explain the teacher's behavior from the point of view of motivation. Because the students have not yet studied and learned

about physical education pedagogy, they cannot see other facts that exist in the physical education class from the points of view based on physical education pedagogical knowledge. These results are based on experiences by which the students have learned in the first-year practical education program. In the first year, the students are trained to observe the class and discuss subjects, such as the teacher's words, behaviors, and/or teaching materials they noticed during class observations. The results of these observations show the students' readiness to study physical education pedagogy. To gain further recognition and understanding, the students need to combine facts with theory or knowledge. They see the facts by observing the physical education class, and they learn the theory or knowledge in the physical education pedagogy class. Thus after these practical education programs where we teach them how to plan learning projects, the students need to learn how to combine theory with practical examples. We may know the stage of development of their points of view if we can know what kind of recognition and understanding the students have learned by observing the physical

education class. The understanding will be the next step of research for teacher education.

This research was the first step in the investigation.